

136 ○寒吟…さびしい声で鳴く。『漢語大詞典』には、「謂淒厲鳴叫」と説明する。『文選』潘岳「秋興賦」に「蟬

嚙嚙而寒吟兮、鴈瓢瓢而南飛」の用例が見える。

○吟 ……鳥獸や虫が鳴く。吠える。「吟」の声は、聴く人を悲痛な気持ちにさせる。

○樸 ……あらき(荒木)を切り出したままで、まだ加工をしていない木材。

○寒蟬…秋になく蟬。

『初学記』「蟬」の項に「礼記曰、仲夏之月、蟬始鳴、孟秋之月寒蟬鳴、徐廣車服雜注曰、待臣加貂蟬者、取其清高飲露而不食也。」の一文を載せる。また『藝文類聚』「蟬」の項に「礼記曰、仲夏之月、蟬始鳴、季夏之月寒蟬鳴」の一文が見える。陰曆五月に蟬始めて鳴き始め、初秋(陰曆七月)に寒蟬が鳴き始めると、いう意味である。「寒蟬」とは、「つくつくほうし」や「ひぐらし」のこと。

『文選』「洞簫賦」に「秋蛸不食抱樸而長吟兮」の一文が見える。秋の蟬は物も食わずに、木の皮に取りすがって鳴き続けるの意である。

松浦友久編の『漢詩の事典』の「蟬」の項では、「秋蟬は何も食わずに、ただ梢に結んだ清らかな露を飲むものと考えられていた。秋風の中で、葉もすがれようとする喬木の梢に止まり、ただ清露をすすって悲鳴高吟する蟬。それが人間の世界に投影されるとき、危ういまでに高潔な生き方の象徴となる」と説明する。

さらに『漢詩の事典』では、『白氏文集』「0510 早蟬」の一部の句、「六月初七日。江頭蟬始鳴、一催衰鬢色。再動故園情、西風殊未起。秋思先秋生。」を引き、つぎのように説明する。

「唐詩に詠じられた蟬の、より平均的なイメージは嘆老と郷愁という二つのやるせない感情によって